

This is an ancient Japanese story set in the area that used to be called the Izumo province in the past.

One day, a man was walking by a river.

That man was a young god named Susanoo-no-Mikoto. Although he used to live in the kingdom of Heaven, called Takama-ga-hara, he was banished from there and had to descend to the human world as punishment for his continuously rough behavior.

While Susanoo was taking a break on a rock by the river, a single chopstick came floating down the river stream.

"Huh, what's that? I wonder if there's someone upstream."

Susanoo then, started to walk along the river in the direction of the upstream.



Eventually, Susanoo came across a young woman crying by the riverside.

"What's the matter, young lady? Why are you crying?"

"Well...actually, there is a fearsome monster called Yamata no Orochi living around here. In my village, there is a tradition to sacrifice a young maiden to the Orochi once a year. And this year is my turn to be the sacrifice."

"Why you don't try to get rid of the Orochi?"

"The Orochi is a powerful serpent monster with eight heads and eight tails. We humans are no match for its enormous power."

"Then I will fight it for you. I'm a god and I'm not a human being."

"You are a god!? Yes, please, please get rid of the Orochi!"

"Then take me to your village first and let's recruit volunteers for the battle. Young lady, what is your name?"

"Very well, my name is Kushi-nada-hime."



むかし むかし、にほんの、いずもの くにと よばれていた
ばしょでの おはなしです。

あるひ、ひとりの おとこが、
かわの ほとりを あるいていました。
そのおとこは『スサノオノミコト』という なまえの、
わかい かみさまでした。
スサノオは『タカマガハラ』と よばれている
てんの くにで くらしていましたが、そこで
らんぼうな おこないを かずかず はたらいたため、
かれは そのちを おいだされ、にんげんたちの すむ、
ちじょうの せかいへと やってきたのです。

スサノオが、かわらの いわの うえに こしをおろし、
ひとやすみしていると、かわかみ から、
いっぽんの はしが ながれてきました。

「ん・・・なんだ あれは。
じょうりゅうに だれか ひとが いるのか？」

スサノオは、かわかみへ むかって あるいていきました。



やがて スサノオは、かわらで ないている、
わかい むすめに であいました。

「どうした、むすめよ。なぜ ないている？」

「はい・・・じつは このあたりに『ヤマタノオロチ』という、
おそろしい かいぶつが すんでいるのです。

わたしの むらでは、まいとし ひとり、わかい むすめを
オロチへ いけにえに ささげる ふうしゅうが あります。

ついに ことしは、わたしが いけにえになる ばんなのです」

「なぜ オロチを たいじしないのだ？」

「オロチは、やっつの あたまと、やっつの おを もつ、
へビの かいぶつです。にんげんの ちからでは
とても たちうちできません」

「では、わたしが たたかおう。

わたしは かみだ。にんげんでは ない」

「あなたは かみさま だったのですか！？」

おねがいます、どうか オロチを たいじしてください！」

「では まず、おまえの すむ むらへ あんないしてくれ。

オロチを たおす ひとでを あつめよう。

・・・むすめよ、おまえの なは なんともうす」

「はい。わたしは『クシナダヒメ』と もうします」

